

市史講座第 12 回ミニレポート

3 月 9 日(土)第 12 回の講座が開かれました。

第 1 部 : 「王家の谷-山代・大庭古墳群と横穴墓」(講師:前島根県古代文化センター長 西尾 克己 先生)



西尾先生は、茶臼山の北西麓にある谷あいにて、6 世紀中ごろから 7 世紀前半にかけて、大庭鶏塚古墳→山代二子塚古墳→山代方墳→永久宅後古墳と出雲を代表する首長墓が続けて造られ、まさに「王家の谷」といえる山代・大庭古墳群を中心にお話されました。

6 世紀後半には、山代・大庭古墳群に県内最大の古墳である山代二子塚古墳(全長 94m の前方後方墳)が築かれるが、同時期には出雲市今市町に大念寺古墳(全長 91m の前方後円墳)が築かれ、出雲の東西の勢力が拮抗していたとされました。

しかし、続く 7 世紀初頭には、出雲東部の山代・大庭古墳群では飛鳥の古墳に類似した一辺 40m を超える大型の山代方墳が築かれるが、出雲西部では規模の大きな古墳が見られなくなるとされました。

その後、出雲東部のこの地は、出雲国府ができるなど広瀬の富田へ拠点が移される中世まで政治・経済の中心地となるが、そのルーツはこの山代・大庭古墳群にあるとまとめられました。

第2部：「歩兵第63連隊の創設と松江の都市社会」(講師:金沢大学准教授 能川泰治 先生)



能川先生は、明治41年(1908)に設置された歩兵第63連隊が松江(当時は八束郡津田村)に誘致されるまでの経緯と、連隊誘致が松江に何をもたらしたかについて、近年の歴史学で盛んに取り上げられるようになった“軍隊と地域”という視点から話をされました。

講演では最初に、日本陸軍の部隊編成、日清・日露両戦争を経験しての軍拡(師団増設)の動向と、軍隊誘致によって山陰地域との地域格差の是正を目指す日清戦争後の地域の側の思惑を解説されました。

そして、連隊誘致が地域にもたらしたものについて、第一に、松江市の住民は連隊誘致による経済的利益をねらっていたものの、津田村にある兵営用地献納に要した費用負担(寄付)は極めて重く、そのため、その見返りとなるべき連隊設置後の社会資本整備をめぐって地域間対立を起こしたことを明らかにされました。

第二に、軍隊(連隊)の側は、毎年3月10日の陸軍記念日に「模擬戦」という大規模なイベント主催し、そこに住民を「動員」することで彼らを総力戦体制の中に巻き込んでいったことを明らかにされました。

また、地元新聞(ジャーナリズム)も軍事力の必要性を繰返し強調したり、日露戦争の体験談を掲載し挙国一致の精神主義を強調するなど、軍縮論の強まりや日露戦争の記憶の風化といった状況の中で、軍隊に対して同調的であった点を指摘されました。